

## 理系的幸福論としての手法

“人間分子論が目指すのは、幸福に関する知の整理と体系化を独自に行い、それに基づいて、幸福を追求するには具体的にこうすればよいという技術を提案することです（本論より）”

第1章において人間とは何かについて考察しました。第2章では、人間は流体中の分子である、というメタファーを用いて、マクロ・ミクロという異なるスケール、および、生物相と文明相という2つの相における人間分子の挙動について考察しました。この2つの章で、人間という生き物の定義と、その挙動の分析・解剖を行いました。これらは、我々が幸福を追求するにはどうすればよいか、を考える前段階にあたります。本章は、人間分子論の最終章であり、幸福に関する基本的な考え方と、どのように幸福にアプローチすればよいかを考えることにします。古今東西の幸福論は、1つの考え方＝思想です。思想がより体系化されたものとして宗教が存在し、その宗教の最大公約数として道徳が存在することは、第1章で述べました。思想は広い概念であり、数多く存在します。各人間が、自分自身や所属する社会に最も適合した既存の思想を、人生・生活の指針として選択しても良いし、新しい視点で新しい思想を提案することも自由なのです。大切な点は、思想は、宗教や道徳と部分的に重複することもありましょうが、それらの部分集合である必要は必ずしも無く、宗教・道徳と、時には矛盾することもある、ということ認識しておくことです。思想の体系は、フォーマットの無い自由書式なのです。

人間分子論における幸福論の記述手法を、ここで、再度確認しておきたいと思います。すでに、第1章、第2章を読んでいただいているとすれば、いわば、記述手法の振り返りであり、より容易に理解していただけたらと思います。人間分子論は、一般的な幸福論とは、以下の点で趣を異にしています。幸福論のほとんどが、エッセイ（読み物）であり、叙述的です。人間分子論が目指すのは、幸福に関する知の整理と体系化を独自に行い、それに基づいて、幸福を追求するには具体的にこうすればよいという技術を提案することです。そのため、エッセイに比べてかなり硬い記述とならざるを得ません。整理と分析・体系化・手法の提案という一連の作業フローは、理系の一般的な手法です。しかしながら、科学論文ではありません。科学論文は、厳密な意味での検証・証明を必要としますが、それは記述の自由度を大きく狭めてしまいます。いわば、幸福に関する多くの知見を、個人的に整理・統合し、体系化を行った、一つの仮説とっていただきたいものです。幸福という一般的で重要な概念について、1つの体系化（切り口）を与えること、しかも従来の文系的・叙述的スタイルではなく、理系的な手法で記述することは、個々人が幸福について深く考えるたたき台を与えるという点で、存在意義があるものと期待します。エッセイよりは難解であり、科学論文よりは容易だと思います。多くの人文・社会学的な思想は、科学的証明が不可能な、ある種の仮説やメタファーに立脚しているのも事実であることを勘案し、寛大に読んでいただくことを期待しています。

### メタファーの利用（理解の容易化）

人生は旅である。このような表現をメタファー（暗喩）と呼びます。人生はもちろん旅ではないのですが、この適切なメタファーは、喜怒哀楽に満ちた人生の本質を、旅になぞらえることによって、極めてシンプルに、しかし、見事に表現しています。人間分子論は、メタファーを多用しています。人間は分子である。これ自体がメタファーです。メタファーと同時に、図やチャートに駆使して概念・思想を見える化（可視化）することによって、理解の手助けとしています。例えば、幸せの収支決算という概念が登場します。収支決算というと、収入・支出・貯蓄というお金のバランスシートを思い浮かべる人が多いでしょう。自然科学では、エネルギー・質量・物質などの保存則が体系の基礎ですが、この保存則は難しい微分方程式の形で記述されます。しかし、実は、保存則とは、収支決算とほぼ同義なのです。経済や物理と違って、

幸せという概念を定量的に計測することは出来ませんが(注1)、定性的であっても、幸せのための行動を、収支決算風に整理し、曖昧模糊とした幸せという概念の理解の容易化を図ろうというのです。

#### 適用範囲の最大化(無人島の幸福論)

数学や物理では、理論・モデルの適用範囲を明確にします。その数式が成立する変域(適用範囲)を中学で習ったはずです。数学・物理の理論は、現実には起こり得るかどうかは別として、極限状態、すなわち変域の端っこにおいて理論・モデルが提示する世界をととても大事にします。何故なら、理論・モデルの表現する世界全体像は、その上限(Upper Limit)および下限(Lower Limit)の範囲内にすっぽりと包含されるからです。しかし、既存の幸福論の多くは、一般的な人々、つまり、適用範囲のど真ん中に位置する、平均的な人に語りかけられているように思えます。人間分子論では、下限(Lower Limit)として孤独な無人島生活、寝たきりの病院生活、窓際族となってしまった会社員、なども想定しています。そのような極限状況は、そうリアルに起こることではないかもしれませんが、これによって、モデルの適用範囲が大きく広がるのです。そのような極限状態の人々でも、その日・その瞬間に、幸福を感じられる堅牢なモデルであれば、多くの人にも参考になるはずです。お金、社会的地位、名声に恵まれた、いわゆる上限(Upper Limit)の人々は、最高の幸福を享受しているのでしょうか。多くの幸福学に関する調査結果はNOと答えます。幸福が極めて主観的なものであるとすれば、お金・名声・地位などの外部条件に必ずしも規定されず、主観的幸福感に直接的な影響を及ぼす内的要因があるのではないのでしょうか。バーランド・ラッセル、ショーペン・ハウアー、マーク・トエイン、トルストイ、アラン、多くの幸福論は著者の置かれた境遇を座標の中心軸として、一般的境遇いわゆる庶民を対象に書かれたものが多いのです。この人間分子論も、著者の境遇の影響を避けられはしませんが、モデルは、あくまで極限状況に耐えうることを目指したつもりです。

#### 概念の定義と属性の明確化(目的と手段の混在)

エッセイや叙事的文章には、目的と手段、原因と結果、などの混乱が認められます。「幸福だから笑うのではない、笑うから幸福なのだ(ショーペン・ハウアー)<sup>[1]</sup>」。一見、世の常識の逆とも思えるこの箴言は、笑い(原因)が幸福(結果)をもたらす本質的要素の1つであることを、見事に指摘しています。人間とは何者なのか、生きる目的は何なのか、について、第1章で挑んできたように、幸福とはどのような状態なのか、幸福を規定する要因は何なのか、など概念の定義を明確にします。お金、地位、名声、あるいは、個人が帰属する、共同体・環境・社会の安全・安心・快適は、それ自体を目的と考えるべきなのでしょうか、それとも幸福を得るための手段と考えるべきなのでしょうか。幸福にまつわる事象が、幸福の原因なのか、結果なのか、その両方なのか、属性を明確化しようというのです。

(注1) 近年の経済心理学における実験手法の洗練により、また、医学・工学を融合した生体センサーの発達により、幸福を定量化できるとする主張も登場しています。実際、国連の幸福度調査は、定量化されていますし、ウェアラブルセンサーの加速度計の示す人間の活動パターンから、幸福度を定量化できる、という説もあります(矢野和男)<sup>[2]</sup>。しかし、経済収支決算が、労働・投資・便益、など異なる属性の要因を、全てお金に換算して整理しているのに対して、幸福に影響を与える様々な属性の要因を、幸福度と同じ物理次元に落とし込んで整理することは、容易ではないでしょう。

[1] ショーペン・ハウアー、幸福について一人生論、新潮文庫

[2] 矢野和男、データの見えざる手—ウェアラブルセンサーが明かす人間・組織・社会の法則、草思社文庫